風 に 吹 か れ て

前作、「散歩の収穫」「風景はこころの旅」を作って1年経った
3作目がようやくできた
あまり変わり映えはしない、腕もあがっていないと言うことになる
1年間のこころに残った記録の集約でもある
この僅かな作業すら歳とともに時間がかかり、煩わしくなる時も
あったが、ただ好きな趣味を続けていける幸せは感じる

村 田 恭 三
2013.3.30

風に吹かれて

六甲山の布引の瀧である　神戸の都会に近く、一足入ると、そこは別天地、5月の爽やかな風が吹いていた
薄曇りで暗い感じがしたが、写真にしてみたら、感じとしては出せたように思う

五 月 晴 れ

兵庫県三田の一こま、電車で40分も入ると、こんな
風景に出くわす　ひと昔ならどこにでもあった光景だ
わら葺きの家もなっかしかった
前に池があり近付けなかったのが残念だったが、
このような風景は遠くから見るのが善いのであろう

初夏の光景

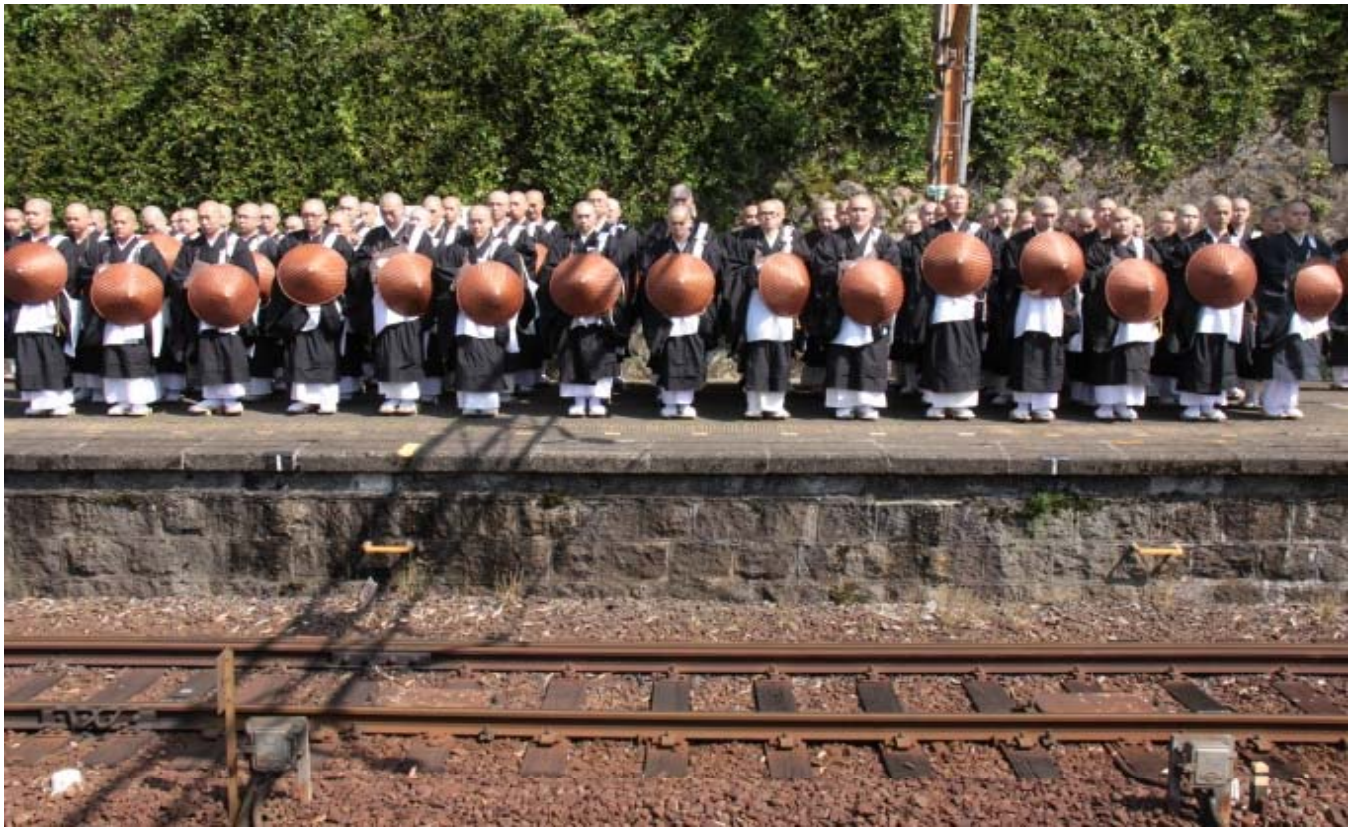
道端のなんでもない光景、日暮れ時ならもう少しましな雰意気になっていたかもと思って、次に訪れたときには、花もしおれ稲も伸び、様子はかわっていた

峠の田植え準備

暗峠の田植えは早い、狭い棚田に水が入る　昔ながらの、田植えが始まるる　つい最近まで手で植えていたが、今では機械が入っている

祭りの日

祭りの日は楽しい　お姉ちゃんの出番で
微笑ましい、姉弟のお揃い
観ていても、清々しい感じがした



高野山の修行層

真田幸村で名高い、紀州九度山の、真田
祭り、山に帰る修行層の勢揃い、小さな
駅は僧の一団で、占められた
行儀のいい僧の並びは総観ではあった

托 鉢 僧

九度山にはこの日、修行僧が托鉢に廻る
家々では、お迎えと接待にわく
どの表情も柔らかで、皆がこの日を待ちわびているように見える

ウォーク会

ウォーク会に入り5年になる　月3回の行事予定
とても3回は行けなが、行くと元気をもらう
皆と一緒に歩いていると、疲れも忘れる
趣味の会は同じ考え、行動する人たちの集まりで、
ああ今日も2万歩も歩いたのかと、後であきれる
記念写真は毎回のこと

花　に　蝶

偶然、蝶が飛んできた　黒い蝶で花の前
の白場に止まってくれる事を期待したが、
思う様にはいかない
どこかに飛んでいった

路　地　裏

何処にでもある路地　生活感
が一杯
ここを通る人はおなじみさん
ばかりかも知れない
今日も路地を行きかう人々

五月のある日

大阪市内、谷町の一隅にこんな家があった
晴れた日の午後、建物も風情も変わっていた
思わず撮ってきたが、これは一体なんのうちなのか
修行場のようにもみえた

どんどろ大師

玉造から空堀町を歩いていると、どんどろ大師に合う
歌舞伎狂言の「名前はお鶴ともおします…」阿波徳島
から、親を尋ねた巡礼が名高い、ここで、親子が巡り
合った場所であろうか　寺の前はその親子の銅像が
ある　　大師ゆかりの寺にはちがいない

さびれた商店街

この、日の出通り商店街の近くで長く勤め
又、戦後まもない時から住んでいた、懐か
しい場所でもある　昔は大阪でも指折りの
繁華街であったのだ
秋田実や吉本が活躍した場所でもある

懐かしい店屋

古くから、松屋町を大阪人はまっちゃまちと読んでいて賑やかで、小さな問屋さんが数おおく並んでいた
その店も今ではすくなくなったが、昔ながらの風情を残している店もある
まっちゃまちに買いに行ったら安いよと、菓子など大量にいる時、買いに走ったことが想い出される

不用品もらいます

会社の前や店の前にいらない段ボールなど置いていたら、いつのまにか、なくなっている　リヤカを引いた、もらいやさんがきれいに持ってかえっている
この光景は、大阪の一等地難波にも存在した

樹　　林

自然と文化会のテーマ課題の作品だ「杜（もり）」
神秘的な光景をイメージした、なかなか撮れない
色々な作品をたくさん撮ったなかの1枚
枚岡神社の周辺で、神が宿るような神秘的な場所を
探すのは至難のことだった

雨あがりの朝

前作を撮るのに苦労したが、これは朝起きて生駒山を観ればこの光景だった
これが生駒山なのかと不思議である、山が変身する
自然は時として、思わぬ光景を観せてくれる
3ツの山が顔をだしていた

花　の　寺

紫陽花の名所は数々あるが、三室戸寺
も広い境内を紫陽花の花で埋める
時期には早いと思って訪れた雨模様の日
大輪の花が迎えてくれた
花好きの人間は待ちきれない

矢田寺の地蔵たち

矢田の地蔵さん、日頃は寂しそうだがこの時期は
晴れ晴れとした顔に見える
どの地蔵さんもいい顔だ　雨の紫陽花の中一層
表情がさえる
赤いよだれかけが、よく似合う

雨に洗われ

紫陽花は雨に限る　地蔵さんも雨に限る
雨に地蔵さんと紫陽花、役者は揃った
あとはカメラマンの技術になるが、これだけはこれぐらいでゴカンベン

竹と紫陽花

紫陽花と竹は案外よく似合う　この時期は竹の時期でもある
竹やぶの中の紫陽花は一輪ひっそりが控え目でよいようだ

警　戒

猫は写真の材料になることが
多い、それでも知らない人には
警戒が強く思うようには撮れな
い　猫好きの人は猫をみると目
の色がかわる
猫も目の色がかわる

猫 勢 揃 い

この猫たちは、おとなしい物で
自由に撮って下さい
そのかわり表情はかわりません、それにしてもユニークな猫たちの集まり

爽やかな旅人

爽やかな旅人に出会った　途中奈良に立ち寄ったらしい
写真を撮らせて下さいと頼んだら、心善くおおじてくれた
にこやかな笑顔がいまも忘れられない
偶然に欧州風のバックになっていた、これからどこに行くのであろうか

雨　の　日

喫茶店の前に障害者用の電動車がおいてあった
赤い傘と黒い傘で雨除けしていた　休憩しているのであろう　この電動車に乗るのは男性であろうか、女性であろうか

夏 草 の 賊

だれもいない寂しい公園だった　夏草だけが我がもの顔で占領していた
ここにいつ子供たちの勢援が戻ってくるのだろうか、子供のいない公園はどこか寂しく、印象深い場所にみえた

赤いひまわり

ひまわりは黄色が定番だが、この様な色のひまわり
もある　一足早く6月の後半から咲く
辺り一面、燃えるような雰意気であった
いずれ、黒いひまわりも青いひまわりもできるかも

屏　風　絵

祇園祭の日、地域一隅の町家に屏風絵が披露される
随分古いものらしいが、保存も大変だろう
祇園祭の楽しみの一つでもある
代々伝わる由緒ある屏風絵、個人展示の協力であるようだ

盂蘭盆法要

四天王寺さん、8月の盂蘭盆法要の日である
写真としては上手く撮れていない、老若男女の善人
の祈りの姿だけは写真に関係なく真剣だった
信仰心の気持も持たず、ただ写真撮るだけの愚か者

夕焼け子焼け

マンションの廊下から観た、夕焼け、日の沈んだあと
次の子焼けが始まった
空が真っ赤になった時、自然の変化に目をみた
下の赤い十字架はなんであったのかわからなかった

祭りの子

9月10月は泉州地区は祭り一色になる
老いも若きも、そして子供も主役
なんとも表情の善かった子
いずれ、だんじり引くか、又々大工方で
だんじりの上で、踊り舞ううことだろうか

だんじり祭り

岸和田だんじり祭り、だんじりは宮入りと決まっているが、ここ山手地区のだんじりは寺入り(行基参り)もある
神社と同じようにお寺に各地域のだんじりが、寺入りする

子　育　て

この写真がもし、自然界ならビックチャンスなのだが
動物園の野鳥園だ　しかし、園内ではなく、園の外
から狙った　そこしか撮る位置がなかった
たとえ、動物園であっても撮れる場所はそうはない

見　守　る

冠鶴、の雛たちだ　冠鶴の頭は、冠を被っているようで見事である
7月に雛が孵るが、雛の成長は早い
次に行ったときは、雛も大きくなり、冠はまだ、生えていなかったが見違えるように大きくなていた

おやつタイム

白クマには毎日おやつタイムがある、掛かりの人が
生きた鯉を水に中に投げ入れる
それを熊は飛び込み、見事にキャッチ、おやつにありつけた　鯉を投げる前に、リンゴを投げるが、熊はよく知っていて　鯉を捕らえてからしたリンゴは獲らない

カバの歯磨き

動物だって歯は汚れる、そこでカバも歯磨き、大きな
口を空け、気持ち良さそうにおとなしい
カバは大型の動物で、動きも鈍い
しかし、ときには水槽の中を暴れ回ることがある
それは、おおよそ繁殖期、雌カバが同居したときなど
2頭が活発に動き、豪快な光景だ

目　と　眼

これはカバの夫婦であるようだ、2頭一緒に入れることは少ないが、一緒になった時は楽しそうにたわむれる　やはり1頭では寂しいそうだ
繁殖期時期以外はいつも離れて過ごしている
カバの目は案外優しく、可愛いい

赤とんぼ

大きな象と小さな赤とんぼが対照的だ
象舎で象の様子を見ていたら、眼の前に赤とんぼが
止まった　その背面に象がゆらゆら身体を振っていた
赤とんぼを狙った後ろがたまたま、大きな象だった

水　遊　び

夏場花園ラグビー場前では、噴水がでる
子供たちはたわむれ、楽しい狂喜の声が聞こえる
手近かな水遊び、さすがに低学年の子供ばかりだ
中には幼児たちも混ざっている

カマキリ

”夜の来訪者”夜ふと見ると、ガラスに、張り付いている
よく見るとカマキリだった　5階の我家までどうして来られたのか
これも、不思議な自然界である

彼岸過ぎて

今年の彼岸花は遅かった
彼岸花な律儀な花で、彼岸の頃に咲く
地蔵さんの前では遅い花が咲いていた

今年も咲きました

彼岸花はある日、突如として目につく、蕾がでてあぁ
彼岸花だなと感じ、花が開くと付近を明るくしてくれる
咲くのも、枯れ廃れるのもいさぎよい
そして、人々が忘れ去るが又来年も咲いてくれる

中町若衆

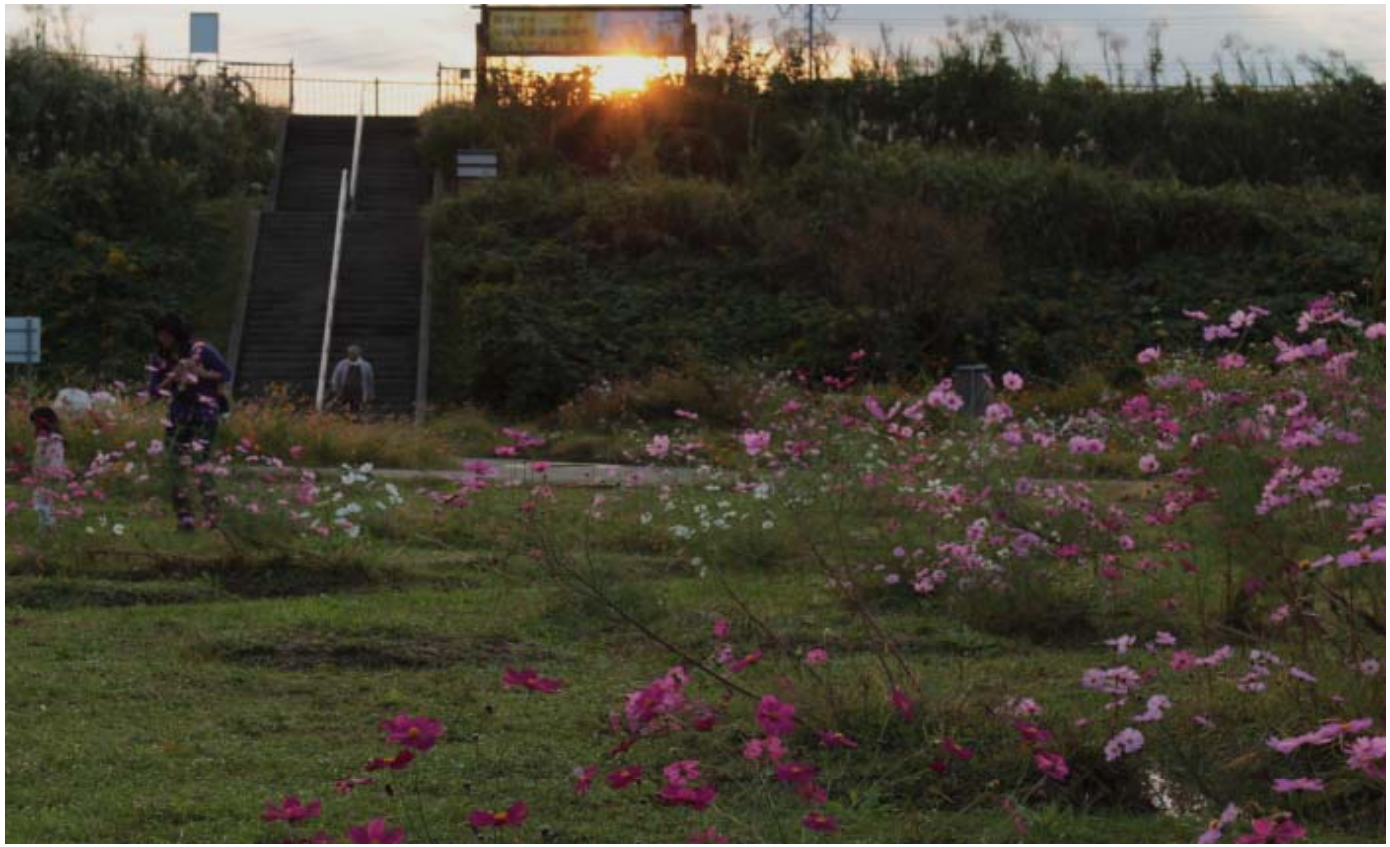
祭りの日の若衆は、どの顔も笑顔で一杯
見ているものまで、清々しさを感じ、こちらまで
若返りそうだ
付近まで一層、幸せを感じさせてくれる

道　頓　堀

大阪の観光名所道頓堀、遊覧船も楽しそう、大きなグリコの看板が輝いている
グリコに手を振っているのか、自然と手が上がっている

風に吹かれて

風が爽やか、鶴見緑地公園のモスモスも
秋風にまかせて咲いている
風車の羽は静かで、廻っている感じがだ
せなかった



黄昏どきA

近所の緑地帯、夕方をめがけて出て行った
この地、夏に水没して全部苗がダメになった　しかし
自然は強い、それからの種まきもあったようだが、再
び芽がでて、弱々しいながらも花も咲きだした
背も低く、まばらな状態、これはこれで情緒がある

黄昏どきB

先の写真の同時刻、日暮れ状態には空が明るい
自然に不満はいえない、技量不足ではある
元来、風景写真は好きだが近年風景が難しくなった
難しいとは、撮るところがなくなったことにある
それでも、撮れる人はどこででも撮れる

暴れだんじり

隣地区の秋祭り、ここは珍しい暴れだんじりがでる
狭い道を練り走る、ローカル祭りは面白い
引き手も乗り手も、見物人も気楽なもの
これが、この地区の伝統のだんじり祭り

祭りは楽しく

若者たちの見せ場、祭りは楽しくなくては
この日1日は思いっきり暴れます
そして、祭りを盛り上げます
楽しくなければ祭りじゃない

枚岡秋郷祭

これより、枚岡秋郷祭の写真を並べる
東大阪一番の秋祭り、伝統も迫力も申し分なし
23台の太鼓台が次々と繰り出す
我らの地域で競い合う、見物人も観取れてしまう

宮　入　り

ここが男の力のみせどころ、祭りは威勢が肝心
枚岡秋郷祭の特徴、一の鳥居から山手に登る
狭い踏切を渡り、宮入りに入る
大勢な見物人の前を太鼓台が走る

祭りの日A

宮入のり順を待つ太鼓台、ミラーに写る姿も祭り気分一色、最近の祭りは引き手も担ぎ手も女性が多くなっている
祭りに男女の差別はない

祭りの日B

枚岡神社の祭りは近鉄枚岡駅との一対作業である
駅、真横の踏切は宮入り道でもある
通過電車は多い、その僅かな間隔で太鼓台は渡る
走る電車の窓越しに通過を待つ太鼓台

道　頓　堀

最近は道頓堀などあまりいかない
偶然通ったとき、こんな光景が観えた
道頓堀川を遊覧船が走っていた
街も観光客で賑わっていたが、これは
中国人の観光であろうか

高架下の街

鉄道の高架下は色々面白い街として利用されている
ここ美章園の高架下も、天王寺の都心に近いが、昔ながらの風情を残しながら、町起こしのための新しい町つくりも考えられている

下町のアート

古い建物に目を引くアート、誰が考えたのか、描いたのか、道行く人を楽しませる
古き懐かしい中に新しいセンス、町が蘇える

生　活　感

こんな所でと思えるが、生活感が溢れている、人は
立派なところに住むのも人間なら、古き善き場所で
住むのも人間である
この人たちの人間味が溢れるような気がする

古き名残

先の写真の表側にあたる、店屋は廃業しても住宅は
立派に住み続けている
狭いベランダにどの様にして自転車を上げたのだろう
住めば都でここを離れる人はいないのであろう

仲秋のころ

丸いピンポン玉、菊一輪地蔵さんに
たむけてあった
黄色い玉と地蔵さん黄色いのよだれかけ
が印象的な光景だった

指図堂観音菩薩

タイトルは、単に自分がこうつけただけで、知識があってのことではない、違っていることだろう
東大寺西、指図堂のなかで拝んだ、この時上がらせてもらい、輝く様な観音菩薩に観えた　これが名のあるものか、そうでもないのか分からない

奈良町の地蔵さん

ここで、目を引いたのは、古い仁丹の看板であった
昔はよくみかけたが、今ごろは観ない
奈良町では昔ながらの光景が目につく
それが、この地のうりもので、懐かしい看板なども
観かける

鹿とのたわむれ

奈良公園の沢山の鹿、子供たちは鹿とのたわむれが
いかにも楽しそう
追いかけられているのか、追いかけられているのか
七五三の晴れ着が気にかかる
雄鹿は角を切られたばかりだ

晩秋のころA

秋も深い、12月、大阪城公園ではまだ、秋の匂いを
残していた
お堀ばたでは紅葉の葉が深く盛れている
今年の紅葉は遅いらしく、最後の晩餐のようだった
足下まで冬が近づいている

晩秋のころB

前作の後ろ側、石垣に張り付くような紅葉
どちらが、表か裏か、自分には、前作が陽、これが陰
のような気がした
石垣と紅葉は取合わせがいい、最盛期ならどうだっ
たであろうか　自分には今が一番のように観えた

矢沢永吉コンサート

偶然に大阪城ホール前を通った
ホール横に、矢沢永吉の絵がデカデカと書かれた
大型トラックが6台が止まっていた
さすがに人気者となれば、トラック6台分の道具や
衣装がいるのかと、感心させられる

秋のコンサート

前のトラックの裏側、これは写真の材料になる
秋と人物を強調して、矢沢永吉の力強い雰意気を
だしてみた
このようなトラックが6台も止まっている、これだけで
壮観ではあった

我が家の干柿

毎年地方の知人から、干柿にする柿を贈ってもらう
今年もベランダに干柿が並んだ　沢山もらったので
干場が一杯になった　そこえ洗濯物、柿が主か洗濯
物が主か、この時期は干柿が優先する

下　　町

この様な風景はどこにでもある
高架下の庶民の町、今も住宅として利用され、親しみ
で離れがたく、昔なっかしい風景である
新線の高架下とは違う

笑いましょう

枚岡神社の「お笑い神事」だれもかれも皆んなで笑う
このときばかりは、大声あげて大口開いてただ笑う
一年のいやな事をふっとばす
神様も笑いは大好き、天の岩戸も笑いで開いた

氏子さん勢揃い

神社の行事には氏子さんの出番が多くなる
寒いときも暑い時も、揃いの羽織と袴すがた
年配者も多いだろうに、厳しい寒さが身にしみる
氏子さんなしでは神社の行事もできない

街

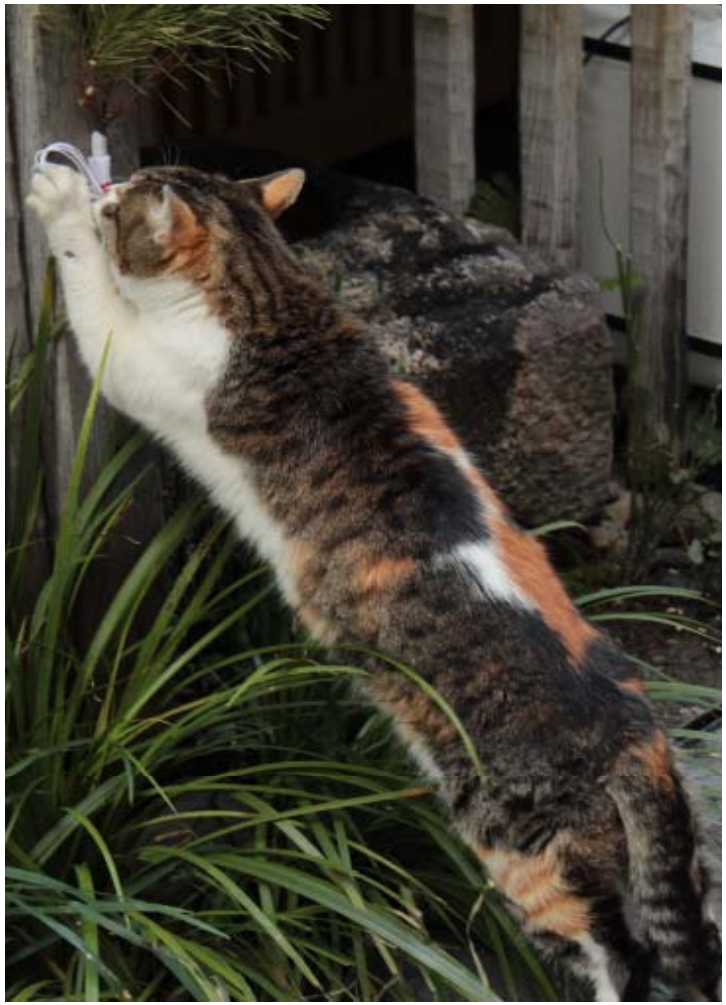
大阪のど真ん中、心斎橋、尼僧だつた
大丸前、ここでなんの布教だろうか
それとも修行だろうか
この場所にしてはあまりにも不釣り合い
に思えた
行く人もただすれ違うだけ

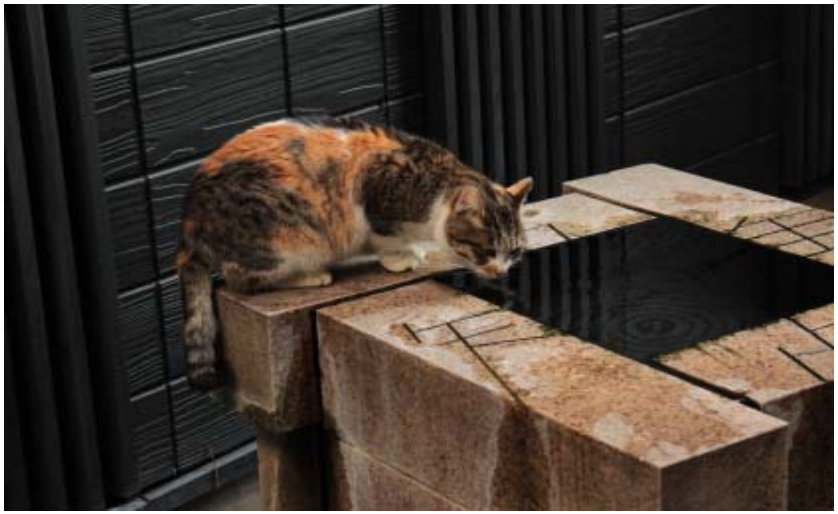
猿之助

亀治郎改め4代目猿之助、人気役者の松竹座
中釣り演技、歌舞伎役者も体力勝負
歌舞伎など観たこともなかったが、観てみたい気がしてきた
しかし歌舞伎は見巧者でなくてはならない

法善寺横丁の猫

お寺や神社にはよく猫が住みついている、ここ
水かけ不動法善寺でも沢山の猫がいる　餌も与えら
れ人慣れしているので、どうどうと暮らしている
飲食店も数多く食べ物には不自由しない、猫には
いい環境の場所である





法善寺の猫

猫を見ていたら飽きない、犬は比較的
のんびりしているが、猫はたえず動き廻る
その猫を追いかけまわすこちらが疲れる
それでもつき歩く、行動範囲が狭いので
いなくなったかと思っても又あらわれる
そうして猫と共に時間を過ごす

鞠 奉 納

枚岡神社の蹴鞠奉納祭、京都の保存会から来る
伝統ある行事である
おごそかな儀式から始まる
鞠と靴はこの行事の主役で、鹿皮と馬皮をミックス
しているようだ

参　進

蹴鞠競技の始まり、勝ち負けを争うものではないが
枚岡神社の急な階段を降り、俄かつくりの競技の場
へ進んでいく
どこまでも儀式だけはおごそかである
伝統とはこうゆうものであろう

出番前のひと時

出番前、神社の宮司さんを交えて話しがはずむ
ここでは宮司さんも脇役だ
蹴鞠は下鴨神社、上加茂神社、談山神社が有名で
この様に枚岡神社にも来てくれる、それでもあくまで
伝統の儀式ではある

女性も参加

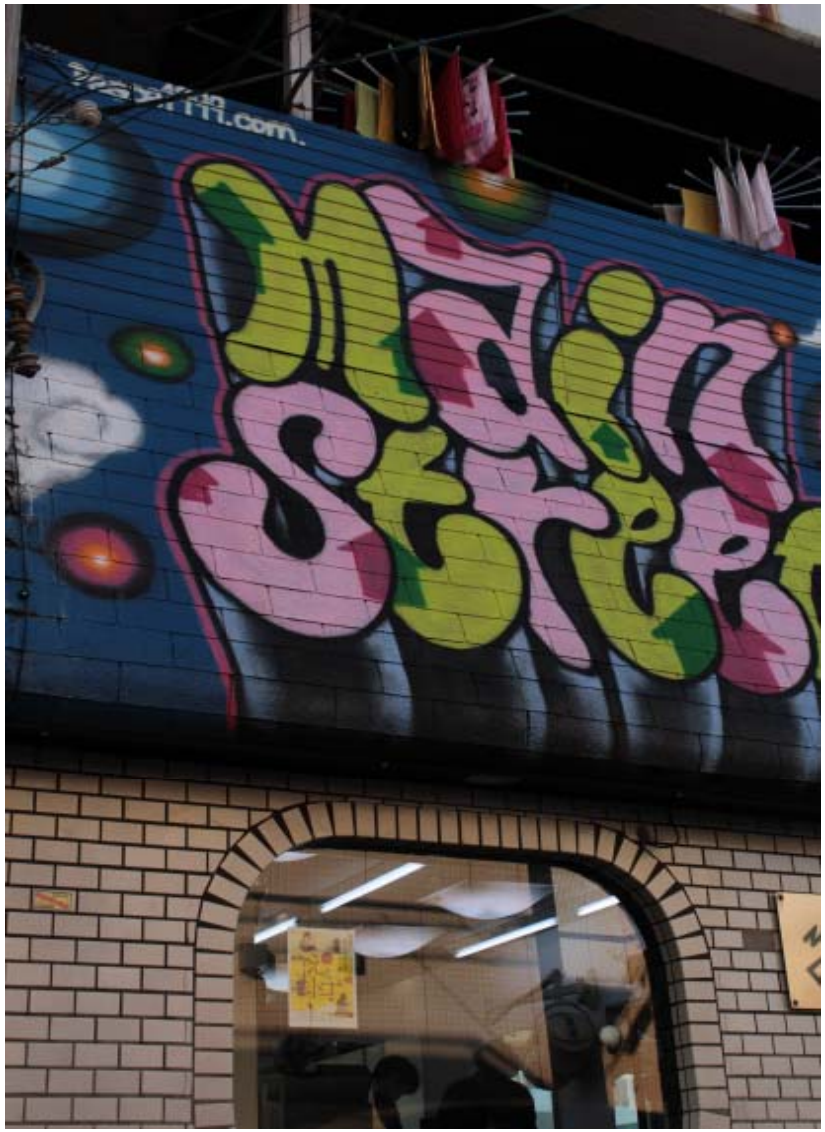
蹴鞠は男性だけのものと思っていたら
女性も参加できるらしい
女性の参加者と話したら、今年始めて
来ましたとのことだった
老若男女、これも現在風になったのか
それにしても女性の鞠つきは一番上手だ

自転車

再び、阪和線美章園高架下にいった
ベタ光線、条件の悪い昼間、2度目の今回は新鮮味にも欠けた
壁に書かれた人形の絵、前に自転車が置いていた
人形が乗っているように見えないかと苦労した　やや雰意気だけはでた

美 容 室

前作の高架下の美容室、派手な絵文字
が気を引いた
上のタオル干し場の真上を電車が走る
お客さんはさぞかしやかましかろうがそれ
も慣れたもの
ここは庶民の街だ



冬 枯 れ

様子からみて随分古い家に思える、ここうちでは
枯れ草も家族の一員
春にはまた若葉、若芽でてくるのであろう
家族であればご自由に、窓は開かずの窓なのか

おばけ

節分には「おばけ」とよばれるお化けがでる
厄除けとしての行事のようだ
特に髪型に特徴をもたすようで、この老婆も髪を振り
かざし面構えがいかにも厄を払うようだ

丸まげ

これも節分のおばけの一つで、若い子が丸まげ風に
結って縁起をかつぎ、祝ったとのことらしい
後ろから豆まきを見ていたが、前の若い子の丸まげ
が一段と輝いてみえた

お～豆まき

最近はどこの行事にいっても大勢の
外人さんが目につく
彼ら彼女らはすっかり日本の伝統に
とけこんでいるようだ

楽しい人淋しい人

白川、巽橋のほとりでこの場所に似つかわしくない
淋しそうな人をみた
道の先より、観光人力者がきた、楽しそうに語らって
いる
いかにも、好対照で面白い光景だった

楽しいレストラン

こんなレストランは想像するだけで楽しい
表の書き絵だがさぞ、愉快だろう
街々にはこの様な店が溢れている
入ってみたい気がするが我々のいく店
ではなかろうだ

幻 の 子

この光景を撮ったが、後で思いだしてもこの子が
人間だったのか置き物だったのか解らない
その様なことも考えず、一つの光景として撮った
置き物だったのであろうが、あの時は正しく人に
見えた印象深い1枚

古木と旧家

いまにも朽ちそうな古木、後ろの板べいが古い商家
この古木と商家はどちらが持ちこたえられるのか
商家は手当もできようが、古木は様子からみて
いつ果ててもいい状態だ　必死にこらえている大木が
いまにも倒れそう

貴重品の棚

この中には余程の古いものが入っていると思う
棚の古さも年代をしのぶ
この様に古い商家は代々に引き継がれていく
古い物ばかりが善いわけでもないが、古いものには
変えがたい価値がある

早　春

早春のいぶき、遅い梅が一輪咲いた
そばの蕾もふくらみかけている
春はまじかに来ているようだ
「冬きたりなば、春遠からじ」

横　綱

偶然通った公園の一画で春場所の稽古
をしていた　横綱、日馬富士の部屋の
大阪宿舎がある　シートで巻いた稽古場
からふと、横綱が出てきた
話しかけると、きさくに話してくれた
感じが善かって日馬富士フアンになった

稽古あがり

大阪春場所、部屋ごとに宿舎ができる
伊勢ヶ浜部屋JR鶴橋近くに部屋がある
稽古場は側の公園にできている
朝稽古、先輩力士が先にあがってきた
付き人はかいがいしく世話をやいていた
相撲界の身分は厳しい　十両誉富士だ

力士の威風

相撲界の立場は厳しい、番付違えば
身分も違う
この力士の番付も名前も知らない
それでも力士の威風は十分ある
将来横綱になっても納得のいくような
風格は備えていた

通 過 待 ち

昼間の電車は空いている　乗客もまばら
通過駅では車掌の乗客も気楽に待つ
真昼の日差しの厳しい頃、ホームにでて
シャッターを1枚
モノクロで不用物を消した　春の昼下がり

雛に見られた男前

高取町の「ひなめぐり」町あげての雛祭り
お店やさんも参加、さんぱつ屋さんも例外ではない
どこの家も古いお雛さんがでてくる
この町、よくこれだけ雛が揃い、保存できたものだと
感心する、その数100軒以上ある

ま な ざ し

この子は何を見ていたのであろうか
見あげるまなざしがいかにも可愛い
この子もお雛さんめぐりであった
後ろに雛段はあるが、見つめる先は母親の顔で
あったのであろうか

おてんば雛

お雛さんとは、優しくつつましいものだが
この雛はおてんばさんだ、静かにして
暴れないで、押さえる親も大変だ
これは、現在雛なのであろう

クリスタル雛

現在風お雛さん、ガラス作りの工芸品
この日のために作ったものである
毎年変わった雛がでてくる
古風な雛と対照的に来年はどんな雛が出
てくるか

春の訪れ

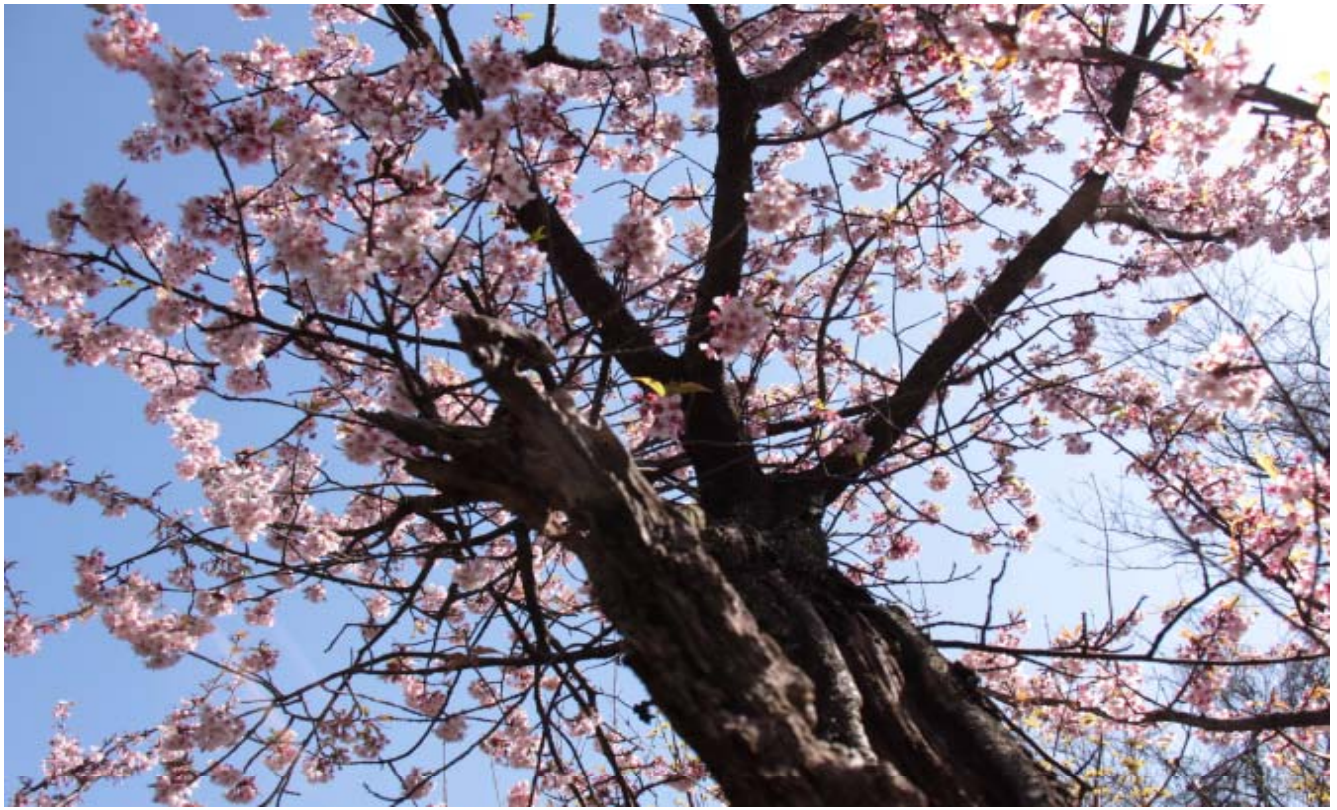
自然は敏感だ、人間は寒い冬で春の訪れを肌で感じない　山里にでて春のいぶきを目でみることになる
彼岸桜からレンギョウ、サンシュウと春の花々が咲き誇る　本番の桜も目前にきている

春 踊 る

サンシュウの後ろの立ち木、なんの木だったか思い
出せない
踊っているように見えた　木々たちも春の到来を待ち
かまえているようだ
この木にもしばらくすれば、青々とした葉が茂る

生き物の楽園

春は生き物の楽園にもなる　小鳥たちはせわしいほどの声で鳴いている
人間も春だと聞いただけで元気がでてくる
寒い冬を越し、生き物すべてが春の到来を待っていたのだ



春 到 来

日頃なんでもない古木に花が咲く 秋、葉が落ち
眠っていたような木が一斉に春の到来を告げる
木の種類には疎い、花桃のように見えた
朽ちかけた木が蘇えるときがきた